

◇ 第一章

すりガラスの向こう側で、複数の人影が忙しく行き交っている。ドタバタと廊下を響かせる足音や、重い荷物を運び込むような低い音が、狭い空間に賑やかに反響していた。

（誰か引越してきたのかな？）

湯船のふちに顎をのせ、私はぼんやりとその光景を眺める。

まだ私という住人がいるのに、勝手に上がり込んできて引越し作業を始めるなんて、随分と非常識な人たちだ。

（……………まあ、私は『幽霊』だけど）

自分の置かれた滑稽な立場に、ふっと小さな溜息が漏れた。

浴室のひんやりとした壁に背を預け、私は立ち上がる。そっと伸ばした右手は、何の手応えもなく浴室の扉をすり抜けた。

私は気がついた時には、この部屋にいた。

自分が誰なのか、どんな名前だったのか、どうして命を落として幽霊になってしまったのか、その記憶は綺麗さっぱり失われている。

今わかつていることは、この白い浴衣を一枚纏ったまま、決してこの場所から離れられないということ。そして、自分が誰の視界にも映らないということだけだった。

「こちら、リビングに置きますねー！」

元気な声が聞こえ、作業着を着た引越し業者の男性たちが大きな家具を運び込んでいく。

当然、私の姿など彼らには見えていない。通り過ぎる作業員の身体をふわりとすり抜けながら、私はふと好奇心を抱く。

（どんな人が越してきたんだろう？）

同居人が気になって、リビングの片隅からそつと顔を覗かせてみる。

「その家具は、そちの壁際にお願ひします」

落ち着いた、低い声が空間に響いた。

そこに立っていたのは、一目で目を奪われるほど端正な顔立ちをした男性だった。艶やかな黒髪に、すつと通った鼻筋。薄手のシャツの上からでもわかる引き締まった身体と、見上げるほどに高い身長。

（うわ……かっこいい人。それに大きい……身長、いくつあるんだろう）

あまりの存在感に、私は思わずまじと彼を見上げてしまった。

けれど、いくら私が至近距離で彼を見つめようと、彼の涼しげな眼差しが私をとらえることはない。私の存在は、風や空気と同じなのだ。

誰の目にも留まらないことに、私はもうすっかり慣れきってしまった。



「ん……」

重い瞼を開くと、目の前に見慣れた天井が広がっていた。どうやらリビングに設置されたばかりのソファで、うっかり寝落ちしてしまったらしい。

窓の外を見やれば、陽が落ちて夜が街を包み込んでいた。

（この同居人さんは、大きなソファがあって快適だなく。今まではずっと床だったし……）

新しい部屋の居心地の良さに心が弾む。

それに彼は仕事が忙しいのか、日中はあまり家にいないタイプのようだった。そのおかげで、私は昼間から誰もいない部屋で、のびのびと過ごすことができる。

（今夜も、まだ帰ってきていないのかな？）

静まり返った室内で、私はのびのびと両腕を高く伸ばして背中を反らせた。

——その瞬間だった。

「……ッ!？」

突如として、見えない透明な鎖で縛られたかのような衝撃が全身を襲った。不可解な強大な力が私を捉え、ぐつと奥の部屋に向かって引つ張られる。

(え……？ なになに……!?)

足が浮き、体が宙を滑るようにして奥の寝室へと引きずり込まれていく。抗う術もないまま、私は閉ざされた寝室の扉をすり抜けてしまった。

「っ………はぁ……っ」

部屋に入った途端、耳に飛び込んできたのは、荒く熱を帯びた男性の吐息だった。ベッドの縁に腰掛けた同居人は、自身が身につけているベルトを緩め、ズボンのフロントをはだけさせていた。そして彼の大きな手で、己のおちんぼを必死に擦り上げている。

(わ………っ!)

あまりにも生々しく刺激的な光景に、私は一瞬で顔を真っ赤に染め上げ慌てて両手で顔を覆い、視線を逸らした。

まさか男性の自慰行為の最中に立ち会ってしまうなんて、いくら幽霊でも恥ずかしすぎて耐えられない。

「……………え？」

静寂を破って聞こえたのは、先ほどの熱い吐息ではなく、素気のない素朴な驚きの声だった。まるで、信じられないものを見てしまったかのような動揺が漂っている。

どうしたのだろうと、指の隙間からそつと顔を上げてみる。

すると、ベッドの上に座る彼と私の視線が混じり合った。彼の黒い瞳が、まっすぐに私をとらえている。

空気までもが凍りついたかのように、私たちは見つめ合った後――。

「……………えっ!？」

重なる二つの驚きの声を、静かな寝室の中に大きく響き渡らせた。



「つまり君は……………この部屋に住み着いている幽霊？」

「はい……………」

ベッドの上で正座し、私たちは互いに向き合っている。

あの後、彼には性器を衣類の中へ隠してもらい、事情をすべて説明した。

彼は状況を整理するように口元に手を当て、悩ましげに眉を寄せていた。けれど私が扉をすり抜ける場面を目撃しているためか、私が本当に幽霊であることを信じてくれたらしい。

「生きてる時のこと、本当に……………何も覚えてないの？ 過ごしてきた日々も、死因も……………」

「覚えてないです……………」

「……………そつ、か。それにしても、ははっ……………幽霊……………すごいな、初めて見

たよ。結構ハッキリ見えるものなんだね」

彼は興味深そうに、まじまじと私を見つめてくる。人に見られるのは久しぶりなので、少し照れくさい。

「あの、私が見えるってことは……お兄さんには靈感があつたりするんですか？」

「いや、今まで幽霊なんて見たことなかったから、靈感はないはずだよ」

首をかしげる彼の様子に、胸の内で小さく首をひねる。引越してきた時から私が見えていたのかと疑ってみたけど、彼の態度や表情に嘘は見えない。どうやら本当に靈感があるわけではないらしい。

「君は……どうして急に俺の前にまた現れてくれたの？　俺に何か感じるのか？」

(……………『また』?)

彼の言葉に少しだけ違和感を覚えた。私が彼の前に姿を現すのは、これが『初めてのはず』なのに。きつと言葉のあやだろうと、私は首を横に振った。

「それは私にもよくわからなくて……リビングのソファで眠っていたら、急にこの部屋に引き寄せられて……お兄さんに見えるようになっていました」

「そつかあ。……………もしかして、俺がオナつてたから精気を吸い取るために引き寄せられたとか（笑） 君ってサキュバスってやつなのかな？」

「そんな洋物ではない自覚ならありますよ……………！」

「あははっ、冗談だよ」

彼はおかしそうに目尻を下げ、揶揄うように笑った。その無防備で甘い笑顔に、ドキリと胸が跳ねる。

（……………顔が良い……………！）

「でも、そつかあ……………あはっ、俺がオナると引き寄せられるんだ……………つてことは部屋から出られないのかな？」

「たぶん……………？」

「ならさ、せっかくだし抜くの手伝ってくれない？」

にこやかに言われた言葉に、私はその場で凍りついた。

（……………え？ このお兄さん、綺麗な顔して、なんて言った……………？）

「……………すみません、よく聞こえなくて」

「俺のちんこを、抜くの手伝って♡」

「……っ!？」

聞き間違いではなかったらしい。

お兄さんの整った顔でサラリととんでもない要求を突きつけられ、私はベッドの上で後ずさった。

「……む、無理ですよ！ お兄さんとは赤の他人ですし……私は幽霊ですよ!？」

「彗（けい）」

「え……?」

「ほら、繰り返して」

「け……彗?」

「そう、鷹城彗（たかしろけい）。俺の名前ね。名前も知ったんだし、これでもう他人じゃないよね?」

「そ、そんな無茶苦茶な……」

「無茶苦茶にもなるよ。いつぶりのオナニーだと思ってるの?」

彗さんはぐつと顔を近づけ、ジリジリと笑顔で距離を詰めてくる。

「忙しくて、気づいたら一ヶ月以上も抜いてない。最近、勃ちづらくて……ようやく硬くなり始めたのに、途中で君に邪魔されたんだよ？　だから手伝ってくれるよね？」

ニツコリと微笑む顔の裏から、ドロリとした腹黒さが滲み出ている。

「お、お邪魔してしまったことは謝りますけど、お手伝いは無理ですよ！　私、幽霊なのでやり方もわかんないですし……」

「大丈夫だよ、ちよつと裸見せてくれるだけでいいから。それに君は幽霊かもしれないけど、俺にとっては可愛い女の子だし、君の見た目、すごくタイプなんだよね」

「そ、それでも……裸を見せるなんて恥ずかしいですよ……！　幽霊にだって羞恥心くらいあります！」

「……………俺は君に、一人で寂しくオナつてるところまで見られたの？」

「そ、それは……………」

「俺だけ恥ずかしい思いをするなんて、フェアじゃないと思わない？ それにさ、君が突然現れたから、勃ちかけてた俺のちんこ、萎えちゃったんだよ？ だから…責任とつてくれるよね？」

口角を上げた慧さんに耳元で低く甘く囁かれ、脳を揺さぶられるような感覚に陥る。

私が突然現れてしまったから、彼の邪魔をしてしまい、彼の…おちんぽを目撃してしまった。そんな罪悪感が湧き上がり、私は悩んだ末、彼の提案を渋々呑むことにした。

「……………わかりました」

「ほんと？ ありがとう。君って優しいんだね」

彼は満面の笑みを浮かべると、詰め寄っていた身体を少しだけ離してくれた。

「それじゃあ…自分で浴衣の合わせ開いて。俺に君のおっぱい見せて♡」

「っ……………」

「ほおら、早く♡」

「わ、わかってますよ……!」

強引な雰囲気呑まれ、私は震える指先で白い浴衣の合わせに手をかけた。ゆつくりと胸元を開き、恥ずかしさに耐えかねて目を瞑りながら、己の柔らかな乳房を晒し出す。

「あはっ、綺麗なおっぱいだね♡ ねえ、自分で揉んで揺らしてみてよ」

熱を帯びた視線に射抜かれ、背徳感に全身が粟立つ。言われるがまま、自分の手で柔らかな乳房をやわやわと揉みほぐし、たゆん♡たゆん♡と揺らしてみせた。

「俺に見せつけてるみたいで、すっごい興奮する……♡ あくく……なんか、触りたくなつてきちゃった……ねえ、幽霊って触れるの？」

「わかんない……です」

「なら、試してみようか？」

隼さんが大きな手を伸ばしてくる。冷たい風のように私の身体をすり抜けるかと思いきや、彼の熱い指先がスリッと私の胸の側面を撫でた。

「え……? んあ……っ♡」

直接肌に触れられた痺れるような熱感に、思わず甘い悲鳴が口から漏れる。

(誰かに触れてもらうなんて、いつぶりだろう……)

知らない人に触れられるなんて嫌なはずなのに、嬉しいという感情が勝つてしま
う。

「へえ、幽霊って触れられるんだ……すご……」

「あつ……♡」

感心したような声とともに、彼の指先は膨らみの上を滑り小さな突起をスリスリ
♡と優しく撫で始めた。

スリスリスリ……♡

自分で慰める時とは全く違う。骨ばった男の指先で、乳首の頭を撫でられ、身体
が火照ってしまふ。久しく忘れていた甘やかな快樂に、私の身体はトロンと解けて
いく。

——ピンッ♡

「ひゃあッ……♡」

不意に、硬くなりかけた乳首を爪の先で弾かれた。強烈な刺激が痺れとなって突き抜け、背中が大きく跳ね上がる。

「爪で弾くたび、おっぱいの上で乳首が揺れて可愛い♡」

ピンッ♡ピンッ♡つと爪の先で両方の乳首を何度も弾かれる。

「んんあっ♡」

「可愛い声出たね♡ 乳首弾かれるの、そんなに気持ちいいんだ……♡」

「ちがっ……ひあっ……♡」

「違うないでしょ。ほら君の乳首、ちよつと硬くなってきたよ」

ボタンを押すように、指の腹で乳首の先端をリズムよく突かれる。そのたびに、芯から甘い振動が胸の奥へと響き、吐息が荒くなっていく。

「ほら、尖った乳首トントンッ♡ 気持ちいいね♡♡」

「んっあ……!♡」

その瞬間、乳首の平たい先端に指先をピッタリと当てられると、柔肉の中に乳首をぐり♡ぐり♡と押し込まれる。先程までとは違う、強い刺激に背中が反れた。

「あゝははっ、ごめんねゝ強かった？ あれ……でも君すっごい気持ちよさそうだね？」

隼さんは口角を上げながら、白々しく言い放った。

そして乳首を押し込んだまま、円を描くように指先を揺らされ、胸の奥で乳首がコロコロ♡と転がってしまう。

くにくにくに♡ グリグリグリ……ッ♡

(胸の中で、乱暴に乳首転がされるの気持ちいい……♡)

「んああ……♡」

「可愛い顔……♡ もっと乳首いじめてあげるね♡」

ぐりぐりっ♡ こりこりこり♡ すりすり……♡

「だめっ……♡ もう、だめ、だからあ……っ♡」

「駄目？ 乳首グリグリされるの好きでしょ？ ほら……見てよ……君の乳首、もうこんなに勃起してる(笑) もっと俺にいじめてほしいってわがまま言ってるみたいだよ♡」

大きな手で柔肉をむにゅ♡つと挟み込まれると、勃起した乳首が更に自分を主張するように前へと押し出される。

「あつ、見ないでえ……♡」

情けなく勃起あがった私の乳首が、彗さんの目の前で晒され、羞恥心で顔を背けてしまいたくなる。

「見せてくれるって約束でしょ？ 約束破る気？」

「ちがっ♡ ピンピンッ弾いちやだめっ……んっ♡」

「弾かれてよがってるくせに（笑）」

彗さんは弄ぶように尖った乳首を指先で乱暴に弾いた。固い爪と指の腹で交互に弾かれ、甘い声が漏れてしまう。

「あぁっ♡ やぁ……♡」

「俺のちんこ勃たせる前に、自分だけ気持ちよくなって乳首勃起させるとか……君は変態な幽霊さんなのかな？♡」

「ちがうっ……♡」

「そんな可愛いトロ顔で言われても説得力ないから♡ ほら、君のエッチな勃起乳首、シコシコ抜いてあげる♡」

「やぁ♡ あっあっ♡」

親指と人差し指で尖りきった乳首をギュッと挟み込まれ、指先でしこしこ♡こりこり♡と擦り上げられる。じわじわと突き抜ける甘い刺激に子宮が窄まってしまう。むぎゅっ♡ こすこすこす……♡ シコシコ……♡

「あっ、やつ……擦らないでえ……ッ♡」

「ふふっ、だあめ♡ 勃起乳首もちんこみたいにシコシコ♡って抜いてあげないとね♡（笑）」

「んあぁッ……♡ 抜かつ、なくていいからっ……♡」

右の乳首をこりこり♡シコシコ♡と指の腹で転がされながら、乳房全体を大きな手でぐにぐに♡と押し潰すように揉みしだかれる。左の乳房では、乳首の先端を爪の先でカリカリッ♡と小刻みに弾かれ、左右異なる刺激に身体を弓なりにしならせた。

こりこりこり♡ しこしこしこ♡ むにゅむにゅ……♡

カリカリカリッ♡ ピンッ♡ピンッ♡ピンッ♡

「ひあッ♡ ああッ♡」

ずしんと重い快樂が胸から下腹部へと突き抜け、私のおまんこから、トロリ……と蜜が滲み出てしまう。

すると乳首を弄んでいた慧さんの片手が私の太ももをスルリと撫で上へと滑っていく。そして脚を押し開くように彼の大きな手が浴衣の裾から侵入し、私のおまんこに直接触れられた。

じゅぷっ……♡

「あれ、下着着けてないの？ ノーパンノーブラで男の部屋の中歩き回るとか……本当に変態な幽霊さんだったんだね♡」

慧さんは人差し指と中指の腹を割れ目に押し当て、ねちゅ♡ねちゅ♡と擦り上げてくる。

ぬちゅぬちゅ……♡ くちゅくちゅくちゅ♡

「それに愛液でびしょびしょじゃん（笑） 幽霊でもこんなに感じて濡れちゃうんだね」

「ひうッ♡ 違っ……♡」

「あゝ、そうだよね（笑） 幽霊とか関係なくて、ただ君が変態なだけだったね♡」

ぐにゅ♡ ぐちゅ♡ ぬちゅぬちゅッ……♡

「あっあっ♡」

「ほら……入り口擦るだけで、ぬちゅぬちゅ♡つてエロい音しちゃうね♡ 男の指で割れ目擦られるの気持ちいいでしょ？」

「気持ち、くなんか……っ♡」

「ふゝん……気持ちよくないんだあ……。それならイッたりしないよね？」

「んっ♡ ……え？」

「もしイッたら、君のこと好きにさせてもらおうから」

彗さんは意地悪く微笑みながら、私の顔を覗き込んでくる。そして、割れ目を強く擦り上げながら時折トントンッ♡と指の腹で押し上げられる。同時に反対の手では、乳首を親指と人差し指で摘まんで、こりこり♡と捏ね回されてしまう。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ トントントン……っ♡

ぎゅむっ♡ こりこりこり♡ むぎゅむぎゅっ♡

「あっ……ひあッ♡ 一緒に……っだめっ♡」

「なんで？ 別に気持ちよくないんでしょ？」

「やっあっ……違っんあっ♡」

「ほーら、俺にまんこぐちゅぐちゅ擦られて……乳首こりこりっでされても、君はイったりしないんだよね？」

「やっあっ♡ 止めっ、とまってえ……っ♡」

彼に縋り付くようにお願いしても、彗さんは指を止めることはなく私のおまんこ
と乳首を悪戯に責め立ててくる。

（乳首もおまんこも気持ちいい……っ♡ イっちやう♡ イッちやう……っ♡）

ぐちゅぐちゅ♡ ぬちゅぬちゅ♡ ぐにゅッ♡

こりこりこりこりこりこり……ッ♡

「ひゃああんッ♡」

上下からの逃げ場のない快楽の波に、私の思考は真っ白に弾け飛んだ。びくびくと体を震わせ、子宮がきゅうつ♡と窄まる。

「あはっ、気持ちよくないって言ってたくせに、もうイッちやったんだ？ ド変態な可愛い幽霊さん♡」

慧さんは嘲笑うように喉を鳴らしながら、私の乳首をピンッとデコピンでもするかのように強く弾いた。

「ひゃあっ♡」

「あはっ、イキ顔も可愛い♡ ねえ、イッたばっかのまんこ、幽霊だとどんな感じになってるのかな？」

「っ、や……離して……っ！」

「だあめ♡ 言ったでしょう？ 君がイったら俺の好きにさせてもらうって♡」

抗おうとするものの、彼の大きな手に脚をぐっと押し開かれ、脚をM字の体勢に固定されてしまう。

彼の目前で私の濡れそぼったおまんこが無防備に晒され、必死に脚を閉じようとするけれど抵抗などまるで意味をなさなかった。

隼さんはそんな私を気にする様子もなく、ベッドの下に跪き、私のおまんこに顔を極限まで近づけてくる。

「うわぁ……幽霊でもここは普通の女の子と変わらないんだね。愛液がたくさん溢れててエロ……♡」

「そんなっ……見ないでえ……っ」

「だあめ♡ 君のエッチで可愛いところ、じっくり見させてねえ……。ふふっ、ほら、割れ目がひくひく♡って震えて愛液溢れてきた……♡ 俺に見られて興奮しちゃった？ 変態（笑）」

直後、おまんこに温かく湿った舌が押し当てられ、大胆に下から上へと舐め上げ

られる。私の口からは、声にならない悲鳴があがった。

じゅるっ、れろ……っ♡

「ひゃあああッ♡」

「あはっ、エッチな味するね♡　すごく美味しいよ……♡」

じゅぶ♡　じゅるりッ♡　ジュポッ♡ジュポッ♡

割れ目を上から下へと、温かく濡れた舌先でじつくりとなぞり上げられては、ピタリと唇を押し当てて蜜を吸い上げられてしまう。

「やあッ♡　なめっ、舐めないでえっ♡　汚いからあ……っ♡」

「んん？　汚くなんかないよ♡　ほら、もつとびらの奥まで舐めてあげるね……♡

」

れろっ♡　れろれろれろっ♡　じゅぶっ♡　くちゅっ♡

温かい舌先が、秘唇の割れ目をぐにゅりと押し開いてびらの間をチロチロ♡と舐め回される。その舌は次第に上へと登っていき、ペロリッ♡と私のクリトリスを舌先で弾いた。

「ひやつあっ♡」

「あはっ、いい声♡ クリトリスも舌でペロペロ舐めて、乳首みたいに勃起させてあげる♡」

「やつダメっ……んあっ♡」

ペロペロペロペロ♡ くにくにくにゅ♡ チロチロチロ……♡

隼さんは舌先を器用に蠢かせ、クリトリスの輪郭をなぞるようにくるくる♡と舐め回す。

（チロチロされるのダメっ……気持ちいいっ……♡ もっとお……♡）

「んむ……じゅぽ、れろ……♡ ねえ、もうぷっくり硬くなってきたよ♡ ちゅう♡ つ♡ つて吸ってあげたらもつと大きくなるかな……？」

はむ……ちゅっ♡ ちゅるっ♡ じゅぽっ……ジュルジュルッ♡

「ひあああッ!? 吸うのダメえッ!♡」

ぷっくりと膨らみきつたクリトリスを唇で直接包み込まれ、ちゅうちやう♡と強く吸い上げられる。

「ああッ♡ またっ、またイッちやう……からッ♡」

じゅぽっ♡じゅぽっ♡と激しくクリトリスが吸い上げられ、私は何度も身体を痙攣させる。

「いま軽くイっちゃったね♡ 早すぎ♡ やっぱり幽霊さんも久しぶりなのかな。それともいつもこういうの？」

「わかんなっ……んあっ♡」

「そっかそっか、覚えてないもんね（笑） それならわかるまで沢山イこうね♡」
「んあっ……ああッ……待つ、ダメっ……♡」

その直後、彗さんは私を解放してくれるどころか、さらに深くおまんこに顔を押しつけてくる。そしてぷつくりと膨らみきつたクリトリスを再び唇で包み込み、ズズ♡と力強く吸い上げた。

じゅぽっ♡ じゅぽっ♡ じゅるるうッ……♡

「ひやああッ♡ も、むりい……ッ♡」

敏感すぎるクリトリスを強く吸い上げられ、痺れるような衝撃が背筋を駆け上が

る。思わず身体を跳ね上げようとしたが、彼の両手が私の太ももをがっしりと固定し、逃げ道を塞ぎ込んでいた。

さらに、吸い上げられた刺激に悶絶する私の割れ目へと、彼の長い指先がぬちり……♡と挿し込まれる。

じゅぷ……♡　ぐにゅっ……♡

「んああッ♡　ナカ、だめえっ……♡」

「んむ……じゅぽ♡　指もすんなり入っちゃった♡　まんこのナカ、蜜でトロトロ溢れてて、すごく柔らかい……♡」

隼さんはクリトリスを口内に含んで舌先で、ぐにぐにつ♡と転がしながら、挿入した指をぐにゅぐにゅ♡と奥へと押し進めていく。

「やあ……ッ♡」

「トロトロだから、二本目もすぐ入っちゃうね……？」

ぬちっ♡　ズチュッ……♡

「んああッ♡」

二本目の指が押し込まれ、ナカの粘膜がぎちぎちに引き伸ばされ、そのまま肉壁をゆつくりと擦り上げられる。

じゅぽじゅぽ♡ ぐにゅ♡ クチュツクチュツ♡

レロレロ……♡ ちゅるっ♡ ぢゅるるっ♡

同時にクリトリスを舌先で押しつぶすように舐められると、わぎとらしく音をたてて吸い上げられてしまう。

「んっ……じゅるっ……♡ ねえ、ナカでどこが一番感じる？ ここかな……？」

膣内に入り込んだ二本の指で、肉壁のザラザラとした敏感な場所を、ぐつと押し込まれる。

ぐぽっぐぽっ♡ ぐりぐりぐり……っ♡

「ひああッ!?!♡」

「あはっ、すごい跳ねた♡ ここが君の良いところなんだ♡ ここを指でグリグリ♡しながら……クリトリス、激しく吸われたらどうなっちゃうかな……♡」

「やつ、ダメッ！ 待って、んあっ♡」

「だあめ、待ってあげない♡ もっと君のエロい顔、俺に見せて♡」

じゅぽじゅぽじゅぽ♡ じゅるるるッ♡

ぐにゅっ♡ ズチュッ♡ クチュクチュクチュッ♡

「あああっ♡ あっ、あっ、ああんッ♡」

クリトリスへの吸引と、ナカの敏感なGスポットを押し潰すような指の動き。容赦のない二重の責め苦に、私の喘ぎ声は甲高い悲鳴へと変わっていく。

「んっくちゅ……♡ 君のまんこ、俺の指にギュウギュウ♡って絡みついてくる…

…すごく可愛いね……♡ 蜜もどんどん溢れてきて、口から溢れそう……♡」

「彗さんっ、けいさんっ……もう、いつちやうっ……またいつちやうからッ……♡

」

「いいよ、イッてごらん？ 俺の指と舌で犯されながら、下品にイッて……♡」

じゅぽおッ♡ ズチュッ♡ グリグリッ……♡

最後の一押しとして、クリトリスを舌でしごかれながら、思いきり強く吸い上げ

られると同時に、G スポットを執拗にグリグリグリ……ッと削り上げられた。

「んああッ♡♡」

視界が弾け飛ぶような強烈な快感が全身を貫き、ナカの粘膜が彼の指を猛烈に締め付ける。

「はあ……はあ……っ♡」

私は度重なる絶頂の余韻と過剰な快楽の連続で、体はすでに限界を迎えていた。全身の力が抜けきり、指先ひとつ動かすことすらできずに、ただ荒い息を吐きながらベッドの上にへたり込んでしまう。視界が霞むほどクタクタで、もはや抗う気力すら残っていなかった。

「あはっ、可愛い♡♡」

けれど、顔を上げた慧さんは、熱のこもった眼差しで私をじっと見つめると、逃げ道を塞ぐようにゆつくりとベッドの上に乗り上げてくる。

男らしい体躯がすっぽりと私を覆い隠し、彼の熱い息が首筋に吹きかけられるた

び、痺れた肌がゾクゾクと粟立った。

「ねえ、君のおかげで俺のちんこもうバキバキ……♡ ほら、わかる……?」

すると私のおまんこに硬く熱を持った太い昂ぶりが、ずり……ずり……♡と押し当てられる。

「んっ……♡」

「俺ので、もっと気持ちよくなろうね♡」

「む、無理です……っ、もう……っ♡」

半泣きで首を振る私をあやすように、慧さんは空いている手で私の頬を包み込み、ゆつくりと唇を重ねてきた。

「んむ……っ♡」

彼の熱い体温に溶けてしまいそうな濃厚なキス。口内に侵入してきた舌が、私の舌をねっとり絡め取り、吸い上げる。息ができないほどの深い唇の重なりに、頭の奥が痺れてぼんやりとしていく。

「んっ……ふはっ……♡ キス気持ちいいね……力抜けてきた……♡」

「はぁ……ん……♡」

「あはっ、トロンとしてて本当に可愛い……♡」

「あ……っ！」

慧さんは亀頭を無防備な膣口に押し当て、ぐふっ……♡と秘唇を押し広げて、ナカへと入ってくる。

じゅぶっ……ずむむ……ッ♡

「ひぁぁッ！♡」

「んっ……すご……ナカで俺のちんこめちやくちや締め付けてくるじゃん……♡」

そんなに嬉しいの？ 可愛い♡ね♡」

太く硬いおちんぼの先端が、蜜で滑らかになった肉壁を力任せに押し広げていく。一度に根元まで貫かれる圧迫感と溢れ出るような充足感に、息が詰まりそうになる。ぐぼっ、ずちゅ……ずふんッ……！

「あんっ♡ おく、は、入っ……っ♡」

「うんうん、奥まで全部入っちゃったね♡ 君の中、すっごい気持ちいいよ……」

♡

すると慧さんは私の腰を掴むと、ナカの肉壁を大きく擦り上げるように、おちんぽをゆつくりと挿し入れる。優しい刺激が心地いい。

にゅちゅっ……にゅちゅっ♡

「んっ……♡」

「ほおら、奥も亀頭でトントン♡してあげるね。気持ちいいでしょ？」

「あっ……気持ちいい♡」

「あはっ、素直で可愛い……っ♡」

「ひゃうっ……!♡」

すると子宮口をトントンと優しく小突くような動きとは一変、壁を押し破るような勢いで奥を突き上げられた。

ずちゃ……ッ!

その瞬間、私の口からは悲鳴が溢れ視界がチカチカと瞬く。けれど慧さんはそんなのお構いなしに、何度も奥を突き上げてくる。

ズチャッ♡ズチャッ♡ パンツ、パンツ、パンツ♡

「ひあッ♡ やあッ、激しく動かないでえっ……♡」

「んんっ？♡ でも君のナカが『もつと動いて』って俺のちんこに絡みついてくるよ？ ほおら、腰引いても無駄だよ♡」

がつしりと腰を掴まれ、逃げる隙すら与えられない。激しいピストンが始まるたび、肉と肉がぶつかり合う音が部屋中にパンツ♡パンツ♡と響き渡る。

「ああッ……♡ ダメえッ！ また、イッちやうっ……♡」

「あはっ、酷くされていきそうなんだ……ほんと変態♡ いいよ、俺に犯されていっばいいきな……♡」

ズチュッ……ズチュッ、ズチュッ♡ パンツパンツ！

「んああッ♡♡」

奥の肉壁をぐつと突き上げられた瞬間、私の身体はびくびくと大きく跳ね上がった。

「あはっ、またイッた♡ ナカが震えて俺のを締め付けてるの、すごく気持ちいい

……♡」

「はあッ……もうっ、許してえ……っ♡」

「駄目だよ。俺まだ一回もイッてないんだからさ……自分ばっか気持ちよくなつてないで、俺のこともちゃんとイかせてね♡」

絶頂の余韻に浸る暇もなく、彗さんは腰の動きを緩めない。むしろ痙攣するナカの感触を楽しむように、わざと遅く、深く、じつくりと奥を突き上げてくる。

ズチュ……♡　ぐにゅっ……♡　ぬちゅ……♡

「ひうっ……!!　んっ……♡」

「ここ擦られるのが一番声出るよね？　ほら、ズリズリしてあげる♡」

ズリズリズリズリ……♡　ぬちや♡ぬちゅ♡

「んあっ……ふぁ……ッ♡」

Gスポットをカリで小刻みに擦り上げられる優しくも、クラクラとするような甘い刺激。同時に、彼の片手が私の乳房へと伸び、無防備な乳首を指の腹でコリコリ♡と捏ね回してくる。

「あっ……乳首、ダメえ……っ♡」

「好きでしょ？ 俺が乳首ギュって摘んであげると……ナカが狭くなってくるよ♡」

「ひあっ、そこおッ♡」

「うんうん、乳首もまんこも気持ちいいねえ♡」

こりこりこりこり……♡ むぎやむぎゆむぎゆ♡

ズリズリズリ……♡ ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡

「はあ……君の中、最高……♡ ねえ幽霊ってさ中出ししたらどうなるのかなあ……ッ？」

ぐちっぐちゅ……ずちゅっ♡ ずちゅずちゅっ♡

すると次第にまた、彼の腰の動きが早くなる。乱暴に奥の壁を押し上げ、グリグリと子宮が凹みそうになる。

「ひあああッ！ けいさんっ……♡ こわ、れるっ、壊れちゃうッ♡」

「あはっ♡ 変態まんこ壊れちゃうね♡ 俺も、もう限界……っ。君のナカ、俺

の精子で満たしてあげるねっ♡」

「やあッ……ナカ、ダメえっ♡」

「駄目が、だあめ♡ ほら出すよ……っ君の一番、奥に……っ♡」

「あああッ♡♡」

ズチャッ……♡ ズチャッ、ズチャッ………！

最奥を力任せに突き上げられた瞬間、子宮口に勢いよく熱い液体が注ぎ込まれる。波打つような激しい射精の振動がナカから全身へと伝わり、私もまた同時に絶頂へと引きずり込まれる。

「ああっ……あ……っ……♡♡」

ドク、ドクッ……と、幾度も奥へ注ぎ込まれる熱い感覚。頭の中は真っ白になり、私は恍惚と疲労の波に呑み込まれながら、ただ彼の背中に腕をまわしてしがみつく。

「ごめんね、ナカに出しちゃった♡」

浅いところまでゆつくりと抜きながら、完全に蕩けきってしまった私に、彗さん

は甘く優しく唇を重ねてきた。

(あ……キス、気持ちいい……)

「ふふっ、気持ちいいね……♡」

胸の中で溢れた私の心の声を拾い上げたかのように、彗さんは何度も、何度も深く唇を食ってくる。

しかし、まだ私のナカへ埋まっている彼のおちんぽが、ゆるゆると挿し入れを繰り返されるうちに、再び硬さと熱感を取り戻していくのが分かった。

「ごめんね、久しぶりだからさ……まだ足りないや……」

「え……っ!？」

挿入されたままの状態で、私の身体はコロンと後ろ向きに回転させられる。体位が変わることで、熱くうねる肉壁が彼のおちんぽによって強く押し上げられる。強烈な感覚に、思わず甲高い喘ぎ声が漏れた。

「ひゃあっ♡」

「今度は後ろからしたいな……♡」

ずぶんっ……♡

「ああんっ……っ♡」

根元まで深く貫かれただけで、背筋を駆け上がるような甘い痺れが走り、身体がびくびくと震えてしまう。彗さんは私を後ろから押さえ込んだまま、容赦のない激しいピストンを繰り返した。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ♡

さらに、ベッドのシートと私の胸の隙間へと彼の大きな手が滑り込み、ふっくらとした柔らかな果実を押し潰すように揉まれ、乳首をむぎゅっ♡と摘み上げられ捏ねられる。

じゅぷ、じゅぷ、ぬちっ……♡　ぐぼっぐぼっ♡

むぎゅむぎゅ♡　こりこりこりこり……♡

「はあっ、ああッ……だめっ、止めてえッ♡」

「止めてあげない♡　君が、可愛すぎるのが悪いんだからねっ♡　あんなに何度も可愛くイって……俺が、どれだけ興奮したか、わかる……っ？」

耳元で甘く囁きながらも、彼は奥を突き上げ私の乳首を執拗に弄んでくる。

「俺をここまで乱したんだからさあ……最後まで責任とってよ……ッ♡」

背中からすっぽりと覆いかぶされ、体重をかけられる。圧倒的な体格差を前に、私は逃げ出すこともできずただ、彼から与えられる快楽を受け入れることしかできなくなる。

パンッパンッパンッ♡

むぎゅ♡ コリコリコリ……♡

「あうッ……イッく……またっ♡」

「うんうん♡ 変態幽霊さんは子宮口ガン突きされながら、乳首摘まれていつちやいなッ♡」

「あああんッ♡♡」

ベッドの上に押さえつけられたまま、身体を幾度も乱され、私は途方もない絶頂の波に呑み込まれていった。



翌朝。柔らかな朝の光が薄いカーテン越しに部屋を満たし、私はゆつくりと意識を浮上させた。

見慣れた天井を目にしながら、身体のあちこちに残る心地よい重だるさに吐息を漏らす。気がつけば、肌を刺すような夜の寒さは消え去り、私はふかふかの羽毛布団と男の人の逞しい腕の中にすっぽりと収まっていた。

乱れていたはずの白い浴衣は、いつの間にか綺麗に直されている。あの後、気を失うように眠ってしまった私を、彼が綺麗に整えてくれたのだろうか。そんな彼の気遣いに胸がキュンとなる。

(……起きなきゃ)

彼を起こさないように身を振り、ベッドから身体を起こそうとした、その時――。
「……っ!？」

後ろから伸ばされた大きな手に、がっしりと腰を掴まれる。逆らえない力で引き

戻され、私はあっけなく彼の胸の中へと倒れ込んだ。

「ん……どこ行くの……？」

耳元で響いたのは、眠気を含んだ低く甘い声。

背後から回された太い腕が私の腹部をしつかりと抱え込み、逃げ出せないように閉じ込める。振り向くと、そこには薄っすらと瞼を開けた彗さんの姿があった。

光を反射して朧げに揺れる黒い瞳、乱れた黒髪、そしてはだけた胸元から覗く男らしい体躯。普段の姿からは想像もつかないほど色っぽく隙だらけな彼の姿に、心臓が大きく跳ね上がってしまう。

「も、もう明るいので起きようかと……」

照れくさを誤魔化すように声のトーンを落として答えると、彼は子供のように甘えた声を漏らした。

「今日は休日なんだし……もつと一緒にゆつくりしようよ……」

スルスリ、と柔らかな頬を私の首元に擦り寄せてくる。首筋に当たる彼の熱い息と肌の触感がくすぐったくて、思わず肩をすくめた。

「ん……あれ……？　なんだか君、昨夜よりも少し温かくなった？」

首元に顔を埋めたまま、彼がふと動きを止めて呟いた。

「え？　そうですか？」

「うん、昨夜も冷たくはなかったけど、温度がなかったから……けど今はあったかい……」

私の疑問を確かめるように、彼が顔を上げて覗き込んでくる。そして視線が交わった瞬間、柔らかく温かい唇が私のそれに重なった。

ちゅっ、と静かな部屋に可憐な水音が落ちる。

「んっ……」

そつと唇が離れると、彼は悪戯っぽく口角を上げ、甘い笑みを浮かべた。そのまま大きな手が滑り降り、私の浴衣越しに下腹部を優しく撫でてくる。

「もしかして……俺がここに精子を注いだから？」

「っ……………」

直球すぎる言葉に、一瞬で顔が熱くなる。昨夜、彼によって私のナカを何度も満

たされた記憶が鮮明に蘇ってくる。

「不思議だなあ、まさか幽霊さんとセックスしちゃうなんて♡」

心底感心したように呟く彼を見て、私はふっと我に返る。照れくささの裏側から、ずっと私の中に潜んでいた小さな不安が顔を出した。

「でも……………私は気味悪いでしょう？」

正体も分からない、生身の人間でもない私。そんな存在と肌を重ねるなんて、本当は気味が悪いと思われているのではないだろうか。

恐る恐る尋ねる私を、彗さんは否定するようにギュッと強く抱きしめてくれた。

「まさか！ そんなことないよ。最初は驚いたけど、なんだか君には、すぐ癒されるんだよね」

包み込むような腕の力強さと、耳元で奏でられる優しい声。言葉の終わりに、再び唇を喰み取るような甘いキスが落とされる。

「またシようね♡」

「む…………無理です！」

彼からのおねだりに、私は即座に声を張り上げた。身体がもたないし、何より恥ずかしすぎて頭がどうにかなってしまいそうだ。

「えゝでも、君も気持ちよかったでしょ？」

「それは……………そうですけど。でもやっぱり無理ですよ！」

「……………それなら、君が自分のことを思い出せるように俺が協力してあげる。この条件ならどう？」

「……………」

隼さんの言葉に、私は思わず彼の胸の中から顔を上げた。

自分が誰なのか、どうして死んでしまったのか、ずっと闇の中に隠されている私の記憶。知りたい。本当の自分が何者なのか、ずっと知りたかった。

「本当ですか……………」

「もちろん。君の好きな物とか、些細なことかもしれないけど、思い出すきっかけくらいなら、俺でも作れるはずだよ」

穏やかな眼差しで見つめられ、私の胸の奥が大きく揺れ動く。ただ部屋を彷徨う

ただだった私の世界に、彼が光を差し込んでくれたのだ。

「そうかも……」

「ね？ だからこれからよろしくね♡ 俺だけの幽霊ちゃん」

隼さんは愛おしそうに目を細めると、甘い笑みを浮かべて私を引き寄せた。

逃れる隙もなく重なる唇から、とろけるような甘い熱が流れ込んでくる。彼の腕の中で、私はただその温もりに身を委ねることにした。